

汲古一巻

『短歌と書写』(一)

中村素堂

歌は調べをつけて唱われてきたから、うたというのだと誰も承知している。事実、古くからの謡いもの、あるいはごく近世のもので、短歌はいろいろに使われているのが多く、なかには唱われていたために知られているようなものもある。

この歌がいま日本の文化遺産のひとつとして、伝存する文献量はどれほどであろうか。そしてそれらの文献のごく古いものはどういう風にして蒐集され、どういう風にして伝存・普及してきたのであるうか。その中で今ちょうど触れた唄などの口伝えのようなものは除いて、これが筆写・印刷などによって、今日容易にわれわれの身邊にまで置かれるようになってきている経過は、古写本の種類やその校合の状況などを知るために、まず第一次の作業としての筆写には、時にひどく興味を惹かれることが多い。

『紀』『記』『万葉集』『古今集』以後の膨大なものは、みな写本かあるいは後生になっての印刷による伝達なのである。最古の歌集としての專著は『万葉集』である。その『万葉集』の中にあるあの四千五百首もの歌は、その以前にも以後にもあの類のものもがもつとあつたかも知れない。とにかくあの大量のものが今日に伝存し得たのは、どういう手段によつたものか。まあ、やはりそれぞれに控えのものがあつたに違ひなからう。いくつかの自家集のようなものもあつたことは、集の中に明記されているけれど、『万葉集』自身の詞書きのようなものによつても、最初の伝達の様子がわかるものも少しはある。

巻五にある「連の吉田宜」の、

おくれりて長恋せずば御苑生の梅の花にもならましものを

という一首に附けてある詞書きの末尾に、「謹みて片紙を付く宜謹殿不次」などとあれば、とにかく最初書かれた型は推察に難くな

い。

同じ万葉時代の一首で、万葉集に載せては無いが、正倉院の古文書紙背にある落書きの、

□国家之韓藍花今日見者難写成鴨、装潢手実。(原文)

——いもが家のからあるの花今日見れば写しがたくもなりにけるかも、装潢手実。

装潢というのは今の表装のことで、表装師の手実という者の相聞歌のようである。実はこの手実二字の下に片かなのノの字のようない画が書かれているから、まだ下に続く字が書かれる筈であつたかも知れないとすると、手実の解釈は変わってくるが、まあ写経所の巻物を造る役人の戯書であろう。

これは筆跡もちよつと優れているので、いろいろの角度から注目をひいて、『万葉集』以外の同時代の一首として有名である。

また大伴旅人が九州在勤時に、対馬結石山の梧桐で造つた倭琴を、都の中衛大将藤原房前に贈つた著名な夢ものがたり風な長い詞書きのあとに、琴自身が歌つたとする体の、

いかにあらむ日の時にかも声聞知らむ人の膝の上わが枕かむに、旅人が答えている形で、

言問わぬ木にはありともうるはしき君が手なれの琴にしあるら

と応じて、天平元年十月七日と日附まである書翰に添え琴を寄贈する二首の歌は、内容の風雅なおもしろさと相俟つて、いい繼がれ書き繼がれていたのではないかと思う。

以上、吉田連宜の歌、大伴旅人の歌はどちらも巻第五にあるものから拾つたが、お読み下さる人の煩をも考えずに、もうひとつ、これは鎌倉時代の短編集『十訓抄』(一二五二年篇)にある、後三条天皇の孫にあたる源有仁、すなわち花園大臣に仕えた侍のものがたり。(つづく)

『祭屋』

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。